

自主シンポジウム 11

幼児の主体性が育ちやすい保育環境の構造

企画者・司会者・話題提供者 萩原元昭（江戸川大学） 話題提供者 井桁容子（東京家政大学ナースリー・ルーム） 島田安子（星陵台めぐみ幼稚園） 結城 恵（群馬大学） 指定討論者 柴崎正行（東京家政大学）

テーマ設定の主旨

「面と向かうと恐れが出て、大事なとき、ノーが言えない。」「買ってもらうためにはごねてみせながらでも待つ」など幼児の気になる行動が見られます。

これらの幼児の行動は、まわりの状況を的確に判断し、自らの自由意思で行動しようとする態度—主体性—と関連しているかもしれません。

今度の幼稚園教育要領の改訂の基本方針の中に「幼児の主体的行動が十分確保されるための幼児理解に基づく教師による計画的な環境構成や遊びへのかかわり…」と主体的な活動が重視されてきているのも、前述のような幼児の状況を反映しているのでしょう。

幼児が主体的に行動しやすいかどうかは環境の構成のあり方により左右されると考えられます。ここでいう主体的な行動とは「幼児なりに思いや願いを持ち続け、かかわっていく活動のこと」をさすとしたら、どのような環境が、そのような幼児の主体的活動を促すかについて明らかにする必要があります。

本シンポジウムでは、幼児の主体性や主体的活動をどのように捉えたらよいか。次に一人一人の個性の異なる幼児が主体性を育くむには、どのような環境構成を行ったらよいか、そのメタ理論はどのように構築したらよいか。実践に学ぶと共に、実際の保育環境構成のあり方について論議を深めていきたい。

話題提供者の提案要旨

井桁容子：これからの保育環境を考える

少子化対策の一環として駅前保育所の設置が積極的に勧められています。子どもたちの心身の育ちの歪みが深刻化している昨今、とりあえず子どもを入れる器を確保するという発想だけでは、人間としての基礎が作られる大切な乳幼児期を過ごす生活の場としては、あまりに不安が多い。歩きはじめの一歳の子どもたちを初めて園庭で裸足にしたときに、みるみる表情がほぐれ、どの子も動きが急に活発になり、まるで足の裏から全身に、何かが立ち上ぼっていくように、表情が輝きはじめました。土、草の上、マンホールの蓋の上など通り過ぎたところを再び戻って歩いてみたりして、その感触の違いに気づいて楽しんでいる様子は自然が子どもたちの五感に理屈抜きにダイレクトに響くもの

であることを痛感したひとコマでした。また、不機嫌に泣く乳児を抱いて戸外に出て風にそよぐ木々や草花を見せて語りかけるうちに、泣きやんで落ち着くという経験は幾度もあり、自然のもつ不思議な力を感じさせられます。また、小さな草の芽をそっと摘み取る、木をおもいきり揺するなど子どものエネルギーを幅広く許容してくれる自然のなかのこれらの体験を通して子どもたちの中に育まれるものは計り知れません。しかしそれらの環境を乳幼児がどうとらえていくかを決定するのは、安心して自己発揮できる穏やかな雰囲気とそれを保証する保育者の役割が大きい。乳幼児がはじめてのものに対するときには不安が強い、好奇心が勝るなど、その子らしさが最も良く見えるときでもあり、それらを見逃さず、その子なりのとらえかたを受け止めながら無理なく的確に関わっていけるかどうかはその後の興味に大きく影響します。私たち保育者の感性が問われるのでしょう。また、家庭の養育力の低下を考えたときに、保育者がゆとりを持って関わることでできる保育人数、乳幼児自身が無理なく把握できる仲間の数、つまりやすらぎのある家庭的雰囲気が保てる保育人数が重要ではないでしょうか。

島田安子：主体性を育てる保育のために

今の子どもたちが育つ中で、主体性を阻む要素は何か考えてみたい。

- ・何でも直ちに、自動販売機式に与えられる環境に慣れてしまっています。買ってもらうために、ねだる、作戦を練る、たまにはごねて見せながらでも待つ。我慢して、何とか要求を通す努力の機会がありません。
- ・何もしないでも、親がやってくれます。こぼしたり、汚したり、壊したりしながら上手になるまで時間をかけて試行錯誤する機会を、初めから与えられていません。
- ・顔を合わせない機械の通信に慣れ、面と向かうことに恐れが出て大事なときのノーが言えません。プツリとスイッチをオフにすることで傷つかずに回避する時代の流れがあります。
- ・ルール無視、きまぐれなものぐさ、自己中心が「主体的な生き方」と思ってしまう。三十年、時代の変化と共に幼児の変化を見続けたの

感想です。これをなんとかしようとするには、保育室の環境だけではない。親ごとの問題として考えなければならないような気がします。めぐみ幼稚園に入園したのを機会に、親もどっしり構えて、少々のはきはき飛ばして、「困ったら自分で何とかする。」自分でサバイバルを覚えてもらいたいと思って身近な努力を試みています。

※お母さんの手作りをお願いします。

通園カバン、仕事着、弁当袋、座布団など、業者のものを売らずに、作り方を指導して手作りをして戴く。中学以来というミシンに悪戦苦闘のなかで、親子の対話と「下手でも自分自身の作、人と違うもの」への自信をもってもらう。

※「母の会役員」は自分から立候補、定員4名より多すぎると、ジャンケンで勝った人になるシステムで任期は兄弟在園中に1年だけ、単年度会計で全面的にその年度の主体的な企画で活動します。

※保育は素朴な一人一人の持つ力を大事に、先生の手作り教材、練習して上手になることを大事にします。一年のうち、どこかでどの子も認められる機会が出るように、少数の主演を作らない。主体性とは、自分を好きになること、自信を持つこと、認められることで強くなって行くこと。

※いつまでも時代に棹させるかなと思いつつパソコン教育は取り入れず、クッキングや山登り、キャンプ、障害者施設との交流など実体験を沢山して、巾広く自分で生きる力をつけることを目指します。

※今年度より午後2～3時代まで、自由に残って、どこの部屋、どの先生と遊んでも良い時間としています。主体的に活動を選ぶ時間。のんびり眺めていても許されるし、お母さんのところへ早く帰りたければ、2時降園も良い。主体性を育てる中には、無為、沈黙、休息、空想など、一見ボーっと退く自由を認めることも大事だと思います。

結城 恵：子どもの＜主体性＞を育てる保育環境
—保育環境の多様性に着目して—

子どもの＜主体性＞をどのようにとらえてきたかは、それぞれの園によって異なります。園が採用する保育形態によっても異なるでしょうし、同じ園でも、子どもの主体性のとらえ方は、保育者によって異なるでしょう。また、保育者は、子どもの主体性を育てるということを常に意識して働きかけているとは限りません。同じ保育者でも、対象となる子どもによって主体性のはぐくみ方も異なっている可能性があります。

そこで、私の報告では、まず、子どもの＜主体性＞

のとらえ方・はぐくみ方は多様であり得ることを、私が過去におこなった、保育形態の異なる2つの幼稚園でのエスノグラフィックな調査をもとに提示しようと思います。次に、保育者が、自分の園の日常的な実践のなかに埋め込まれている＜主体性＞のとらえ方を掘り起こし、そのうえで各園の特徴を活かした、子どもの主体性のはぐくみ方のありようを検討する視座をもつ重要さを指摘したいと思います。最後に、そうした＜主体性＞のありようを探るひとつの方法として、実践者と研究者の協働作業によるエスノグラフィを提言したいと思います。

萩原元昭：幼児が主体的に活動できる保育環境の構造—アコモデーション (Accommodation) をメタ理論としての提言—

主体性という言葉は一般に能動的な社会的行為の拠り所を示すものとして使用されたり、デュルケムのように「社会の中の人間」という視点からの集団的主体性と、それに対する G.H.ミードのように「人間の中の社会」という視点に立つ個人的主体性と分けて考えることもできます。ここでは、能動性、特に幼児の個人的主体性に着眼して考えてみることにします。もちろん、能動性といっても、他の、人間としての共通の特徴である有能性と、人とかかわる力と無関係ではありません。むしろ、幼児の主体的活動を考える際に重要なのはこの遺伝子に埋め込まれている有能性と能動性が、多様な人と関わることにより、育成されやすいという特徴です。いいかえれば、幼児と遊び仲間や保育者とのコミュニケーションのあり方を規定するアコモデーションのシステムが重要です。前述の能動性とそれに関連する有能性、それを規定する人とかかわる能力その組み合わせた物を個性と捉えるなら、個性開放のシステムの中核にあるキーワードがアコモデーションです。アコモデーションは幼児と幼児、保育者と幼児の二者の間のコミュニケーションモードを示しています。居心地の良い保育室でなく事務室で遊ぶことを許したり、園にきてまだ日本語ができないリサに園児が一つ一つ教えたり、オモチャを譲ってあげたりすることもアコモデーション（自立的援助）の一例です。このアコモデーションシステムが、保育環境として主体性を育成しやすいのは、この種の二方向性のコミュニケーション体系が、他者の動機づけや心理的要求に向けてのコミュニケーションや方向づけを促進する特質を持ち、幼児一人一人の個性の相違や主体性を明確にする方向に機能する話し言葉を育成し、新たな役割を創造する可能性を有しているからです。